

(城西人文研究第 25 巻第 1 号)

『レノーレ』のケルトの余韻

永井豊実

Ein Märchen aus alten Zeiten,
Das kommt mir nicht aus dem Sinn.
〈いにしへの語り伝えが、心について離れない。⁽¹⁾〉
—H. Heine

序

シューベルト⁽²⁾の歌曲『魔王』(1815年)は、不安におののく子どもを父親が抱いて、馬を駆けていく様子を見ごとに歌い上げている。このリート⁽³⁾の歌詞はゲーテ(1749~1832)の詩・『魔王』(Erlkönig)で、1782年に作られ、ヘルダーの翻訳したデンマークの民衆バラード・『魔王の娘』から採られている⁽³⁾。この詩の大筋は、夜中に父親がひた走りに馬を駆けていく時、子どもは、魔王の姿が見えないか、囁き声が聞こえないか、魔王の娘が暗がりに潜んでいないか、と言って訴える。父親はそれは夜霧だとか、枯れ葉のざわめきだとか、古い柳の影だとか言って慰める。ところが、霧や枯れ葉や柳は皆死を暗示しているものなのである。魔王は花が咲いていて、わしの母親が衣装をたくさん持っているのだから、そこへ行こうとか、自分の娘と一緒に揺すったり、踊ったりして、歌って眠らせてくれるから、そこへ行こうとか言って誘惑する。最後に魔王は

わしはお前が好きだ。美しいおまえの姿がわしを魅惑するのだ。

Ich liebe dich, mich reizt deine schöne Gestalt.

と言う。その時子どもは

お父さん、お父さん、今魔王がぼくを掴まえる！

Mein Vater, Mein Vater, jetzt faßt er mich an!

と言って叫ぶのである。しかし父親はどうする術もなくただ走るだけであって、やっと館に着いた時には、子どもは腕の中で死んでいた (In seinen Armen das Kind war tot.) という。最後のトート (tot) が印象的に響いている。美に魅せられて人の命を奪う魔王と、魔王に魅せられて死に取りつかれた子どもとでは、魅入られた者のどうしようもならない運命なのであろう。単に病魔に取り付かれた、とだけでは言いきれない何か魔的な魅惑を持つ死への誘いがある。これは一体どこから来るのであろうか。英・独ロマン派の詩人に影響を与えたという、ビュルガーの『レノーレ』がその秘密を明かしてくれそうに思える。

I

ビュルガー (Gottfried August Bürger 1747~1794) は、1773年に『レノーレ』 *Lenore* を書き、これが1774年号の《ゲッティンゲン年間詩集》 (*Göttinger Musenalmanach*) にヘルダーやゲーテの作品と共に載った。ゲーテは若い頃ヘルダーと交友があり、彼から叙情詩について学び取っていた。ヘルダー (Johann Gottfried Herder 1744~1803) は1778年から79年にかけて、『民謡集』 (*Volkslieder*) を出版し、1807年以降は、それが『歌謡における諸国民の声』 (*Stimmen der Völker in Lindern*) という名に変えられて出版された⁽⁴⁾。ゲーテが『魔王』を書いたのは1782年であるから、4年前に既にヘルダーの『民謡集』を知っていて、『魔王の娘』からヒントを得たのであろう。ところがビュルガーの『レノーレ』の方は1773年の作であるから、ヘルダーの『民謡集』より5~6年も前であるので、直接的には知らなかったと思われる。二人に共通していることは、パーシー (Thomas Percy 1729~1811) が1765年に出した『英国古謡拾遺集』 *Reliques of Ancient English Poetry* に傾倒していたことであって、そこから大いに影響を受けていたということである。それに

よって、ヘルダーはリトアニア民謡の収集を始めたのである⁽⁵⁾。一方、ビュルガーは『愛するウィリアムの亡霊』*Sweet William's Ghost*⁽⁶⁾の影響を受けて、『レノーレ』を書いていると言われている。ウィートレイ (Henry B. Wheatley) 編のパーシーの『英国古謡拾遺集』には、「リンボルト博士が指摘するように、ビュルガーの『レオノーラ』の主な出来事はこのバラッドの出来事と似ている」⁽⁷⁾と書かれている。ただこのバラッドをよく読むと、これだけではなさそうで、更に『うたびとトマス』*Thomas Rhymer* とかいった伝承バラッドの影響があるように思われる。

[なおここで英国で訳されたタイトルを記しておく、テイラー (Taylor) は *Ellenore* (初めは *Lenora*)、スコット (Scott) は *William and Helen*、ブレイク (Blake) は *Fair Elenor*、ロゼッティ (D. G. Rossetti) は *Lenore*、となっている⁽⁸⁾。なお、リンボルト博士は *Leonora* と言っている。ここでは原文からにするので、「レノーレ」*Lenore* とする。]

II

パーシーの『英国古謡拾遺集』(1765年)が、ビュルガーの『レノーレ』(1773年)に影響を与え、それがテイラーの訳(1790年)により、ワーズワースやコールリッジにリリカル・バラッド(1798年)への着想を与えたと言われている。更にブレイクやキーツ等への相乗的な波及があったようである⁽⁹⁾。しかし『レノーレ』が契機になったとはいえ、その底にはパーシーの『英国古謡拾遺集』があり、更に伏流としては伝承バラッドのケルトの流れがあった⁽¹⁰⁾。

そこで初めにパーシーの『愛するウィリアムの亡霊』*Sweet William's Ghost* を読んで、そこに表れている主な特徴を探ってみることにする。

先ず第1連の最初に「マーガレットの戸口に亡霊がやってきた」とウィリアムの亡霊が出てくることである。これは作者、または語り手の見方が入っていて、最初に亡霊と言ってしまうことである。ところがこのあとの二人の会話を追ってみると、初めはマーガレットにはウィリアムが亡霊だとは分からない。

夜遅く外からかける声を聞いて、父か兄かウィリアムかと訝るのである。「愛の誓いを返しておくれ」とせがむウィリアムの声を聞いて、「教会へ連れて行って指輪をはめて結婚するまでは返せない」と言う。この時ウィリーは

ぼくの骨は、遙か遠い海の向こうの

教会の墓地に埋められている。

今お前に話しているのは、マーガレット、

ぼくの魂に過ぎないんだ。

My bones are buried in a kirk yard

Afar beyond the sea,

And it is but my sprite, Margret,

That's speaking now to thee.

と言う。このように亡霊が生きている人に対して普通に話し掛けること、亡霊と生者とが自然に対話をするのがこの種のバラッドの特徴である。マーガレットの父も兄も、恐らくスコットランドへ戦いに行っていて、生死の程は分からない。帰りを待ちわびていたマーガレットの所へ帰ってきたのは、亡霊のウィリーであった。ウィリーは「愛の誓い」(my faith and troth, いわゆる troth plight といわれる)を返してもらえないと、安らかに眠れないのである⁽¹¹⁾。先にウィリアムは「スコットランドから今帰って来た」と言う。ところがここでは「遙か遠い海の向こうの教会の墓地」と言っている。イングランドであるならば陸続きであるのに、何故海の向こうなのであろうか。バラッドにおいては、海や野や丘や森はこの世とあの世との境界線なのである。「海の向こう」はケルトの民がかつてヨーロッパ大陸からローマ人に追われてイングランドに渡り、それがまたアングロ・サクソンに追われてアイルランドに渡ったり、ブルターニュに戻ったりした民の潜在的意識の中に残っている境界線であったと思われる。「今お前に話しているのは、ぼくの魂に過ぎないんだ」と言われて、マーガレットは「この世での愛の誓いはいったん清算して、墓の中でふたたび

結ばれるため」⁽¹²⁾に愛の誓いを返してあげる。そして緑の服 (fairy colour) を着て⁽¹³⁾、ウィリーの後を追って墓場に行く。チャイルド版 77B では、ここで話の飛躍があって、境界を越えて死者となっている。ところがここではそれに触れられず、生者と亡霊とが一緒にいくのである。『レノーレ』の場合もそうである。マーガレットは「枕元か足元か、または脇は空いている？そして入る余地はある？」と言って聞く。それに対してウィリーは「柩はピッタリできているので入る余地は無い」と言う。ただしチャイルド版 77B では「その脇へ入れるかしら」⁽¹⁴⁾と言っているなので、語り手の異なった見方が入っている。伝承バラッドは淡々と事実を述べるだけで、感情は入らないのが普通である。ただ何度も読むうちにいつしか愛する者のひたむきな感じが伝わってくる。そして

その時赤い赤い雄鶏が、起きて鳴きだした、

その時起きて薄明の時を告げた。

時間だ、時間だ、愛しいマーガレット、

ぼくが消え去る時なんだ。〔14 連〕

Then up and crew the red red cock,

And up then crew the gray:

Tis time,tis time, my dear Margret,

That 'I' were gane away.

と言って霞の中に消えていってしまう。後に残されたマーガレットは亡霊の後を追って死んでしまう。最後の 15, 16 連は誰か他の人が後になって付け足したようなので、取って付けたような、不自然な感じを与える。この 16 連の短いバラッドの中で、亡霊と生者との愛の交流が濃密に纏められている。こうした要素をビュルガーはどう受けとめていたのであろうか。

III

ビュルガーの『レノーレ』は、前半 12 連迄と後半 32 連迄とに分けられる。ここで話の概要を追いながら、主な特徴を考察していくことにしたい。

レノーレはある明け方、虫の知らせか、はっと目が覚めて、恋人のウィルヘルムのこと胸騒ぎを覚える。フリードリッヒ王の軍隊に加わって、プラハへ行ったまま何の音沙汰もない。長引く戦争もやっと和睦となって、軍隊は帰国の途につき、町に帰ってきた。昼間みんな歓呼の声で迎えている時、レノーレは隊列の中にウィルヘルムの姿を見出すことはできなかった。必死になって捜し、兵士に聞いてみるが誰も知らない。隊列が過ぎた後、レノーレは狂ったようにもだえ苦しむ。その姿に母親は心配して、諦めて神に祈るように勧める。しかし彼女は総て終わってしまったと言って、神の無慈悲を嘆くのである。お祈りも役に立たないし、秘蹟も苦しみを和らげてはくれない、と言って死を望む。「消えろ、消えろ、とこしえに、私の光よ」(Lisch aus, mein Licht, auf ewig aus!) [11 連] という言葉は、『マクベス』の ‘Out, out, brief candle! Life’s but a walking shadow;’ 「消えろ、消えろ、ローソクの火よ、人生は歩く影に過ぎないのだ」を思い浮かばせる。母親は娘の神への暴言に神の許しを請う。娘はあの人と一緒に居ることが至福であって、ウィルヘルムが居ないなら地獄だと言って、もがき苦しむうちに夜となる。

この 12 連までの要点と思われることは、レノーレの愛する人を亡くした苦しみと共に、神・キリスト教が出てくることである。母親はただ神にすがって慈悲を請うばかりである。一方娘の方は神の無慈悲を恨み、不信を覚え、死のうと思う。母親は娘の神への冒瀆的な言葉に更に神の許しを請う。そしてこの後で亡霊が出てくることにより、キリスト教と相容れないものを際だたせることになる。ところがバラッドにおいて、この両者が混在しているところに、歴史的な流れと、ケルトの民の魂が込められていることが分かってくる。

第 13 連から『ウィリアムの亡霊』と同じように亡霊が現れる。馬のひずめ

の音がパカッ、パカッ、パカッ (trapp trapp trapp) と聞こえてきて、レノーレの家の門の前で止まる。そして門の輪環ががちゃがちゃと外される音が聞こえてくる。この音はパーシー編の ‘And ay he tirded at the pin;’ 「そして錠をがちゃりと鳴らした」 [1 連] と同じ響きが伝わってくる。『レノーレ』の一つの特徴として、馬のひずめの音とか、呼びかけの声 (Holla, holla!) とか、驚きの「うわー」 (Huhu) とかいう擬音が多用されており、臨場感を持たせている。そして門を通過して入ってきて呼びかける声を聴く。

眠っているかい、愛する人よ、それとも起きているかい？

Schläfst, Liebchen, oder wachst du? [14 連]

という言い方は、チャイルド編の Sweet William’s Ghost (77B) の第 2 連と全く同じである。こちらはサーンダズ (Sanders) とマーガレット (Margret) となっている。

‘Are ye sleeping, Margret,’ he says,

‘Or are ye waking, presentlie?’

となっているので⁽¹⁵⁾、パーシー編にはこの言い方は無い。ということは、既にチャイルド編と同じものが何かの形で巷間に出ていて、それを見ていたのであろう。とすると、パーシー編だけの影響とは言えないようだ。

こう呼びかけられて、レノーレはずうっと起きて泣いて、悲しんでいたと答える。そしてウィルヘルムにどこからやってきたの、と聞く。彼は遙かボヘミアから駆けてやってきたのだと答え、今直ぐにお前を連れていくと言う。マーガレットは

風がサンザシの中でヒューヒュー鳴っている、

Den Hagedorn durchsaust der Wind.

ので家の中に入ってくださいと言う。この荒涼とした感じの風の音は、テニソン (Alfred Tennyson 1809~1892) の『姉妹』 *The Sisters* のバラッドに出てくる、

風が塔と樹立のなかを吹いている。

The Wind is blowing in turret and tree.

を想起させる⁽¹⁶⁾。ウィルヘルムは、風はサンザシの中でヒューヒュー鳴らせておけと言ひ、黒馬が足を踏み鳴らし、拍車が鳴っているので、急いで馬に乗って何百マイルも先の我らの新床へ行こうと言う。彼女は部屋はどこにあり、婚姻の新床はどんなものかと聞くと、ずうっとずうっと遠い所で、静かで、冷たくて、小さなもの、だと言ひ、6枚の厚板に、2枚の薄板だと答える。ここで初めてお墓であることを暗示する。ここ迄マーガレットは相手が亡霊とも思わずに、自然に話をしている。ところが、私も入る余地がある？(Hat's Raum für mich?) [18連] と聞くところをみると、どうも相手が亡霊であるということが分かっているようにも思えてしまう。死者としての意識を持たないこと、「生の永続を当然のものと受けとめていたケルト人にとっては死と生は同義語で、「死」＝「生」の等式が成り立っていたかもしれない⁽¹⁷⁾」というケルトの意識、ドルイド教の思想を理解しなければならないようである。そもそもアイルランドやブルターニュ地方においては、キリスト教が普及を押し進めようとした際に、土着の民の信仰を利用しつつ、溶け込ませていった結果、表面的にはキリスト教で、潜在的意識の中ではドルイド教・ケルト神話が生きていたのである。

そして美しい恋人は馬に飛び乗って、ユリのような白い手を騎士の腰に回すと、全速力で月明かりの中を駆けていくのである。ここからがビュルガーの真骨頂と思われるところである。

死者は駆けるのが速いのだ。

Die Toten reiten schnell.

と言って馬を駆ける。ゲーテの『魔王』での馬を走らせる感じもここから来ているように思われる。この馬を走らせるというのも、『うたびとトマス』*Thomas Rhymer* の第6連、

女王様はミルク色の馬を回して

トマスをうしろに乗せました

鞍がかたかた鳴りました

風より速く行きました

(藪下 卓郎氏訳)⁽¹⁸⁾

She turned about her milk-white steed,
 And took True Thomas up behind,
 And aye whene'er her bridle rang,
 The steed flew swifter than the wind.

の感じを受け継いでいるように思われる。異界への旅において馬を走らせるのは、「ケルト神話の英雄オシーンも妖精王の娘ニアヴの白馬に乗せられて、常若の国（テイル・ナ・ノグ）に連れられていかれてしまう」⁽¹⁹⁾ ところにも出てくる。この走る様は、19連では

そして急げ 急げ，ホップ ホップ ホップ

全速力で駆けていった。

馬も乗り手も鼻息荒く

砂利や火花が飛び散った。

Und hurre hurre, hop hop hop!

Ging's fort in sausendem Galopp,

Daß Roß und Reiter schnoben

Und Kies und Funken stoben. [19連]

と書かれ、23連でも26連でも繰り返される。野原も畑も飛んでゆき、橋はガラガラと雷みたいに鳴った。村も町も部落も、丘も林も垣根もどンドン飛んでいった。そして途中カラスが何故飛んだのだろうかと言ったり、吊いの鐘を聴いたり、葬列に出会ったりして、その墓掘人や聖歌隊や牧師に声をかけて、一緒に来るようにと誘う。こうして月の煌々と照る中をひた走りに走っていく。このリズムは、シューベルトの『魔王』にも巧みに表わされているし、この描写は画家たちにも興味を抱かせ、特にフランスのオラース・ヴェルネ

(1789～1863) が描いた『レノーレのバラード』(1839年)の絵は、暗い背景の中を娘を乗せた騎士が馬を走らせ、その騎士の顔の胄に手を掛けている。中から白く光る目がぎらぎらと輝いていて、ドクロの顔が不気味に覗いているのである。回りは墓で、馬の足元には石棺が横たわっており、その上をまたいでいる。馬の蹄鉄からは火花が飛び散っているのである。同じように、アリー・シェフェール(1795～1858)にもあり、タイトルが『レノーレ、死者の足並みは速い』(1830頃)となっている⁽²⁰⁾。こうして走っている時、絞首台のそばでは亡霊たちがふわふわと歯車の回りを輪踊りをしている。何故歯車が出ているのであろうか。恐らく、ケルトの輪⁽²¹⁾に通じるものがあるようだ。そして婚礼の輪舞を踊ってくれと言って誘い、空も星も飛ぶように走っているうちに、雄鶏の鳴く声を聴く。これも『愛するウィリアムの亡霊』の中の「その時赤い赤い雄鶏が起きて鳴きだした」を思い起こす。砂時計の砂が流れ落ちてしまう、朝の大気の臭いがする(ich wittre Morgenluft...) [28連]と言って黒馬を急がせる。そしてやっと婚姻の新床の開いている場所に着いたと言って、手綱を弛め、鉄の格子門へ向かって行き、しなやかなムチの一撃を与えると、鍵と門は跳ね飛んで門は開いた。亡霊には扉を開かせる魔力があるようだ。月の光の中に墓石が立ち並んでいた。その時、騎士の胸当ては一つずつ錆びた火口のようにずり落ちていって、顔はドクロとなり、身体は骸骨となってしまった。そして手には砂時計と鎌を持っていた。ここで面白いのは、砂時計を持っていることである。普通ブルターニュでは大鎌とスコップである⁽²²⁾。大鎌は時の女神も持つ物である。目隠しをして鎌を振っているのです、誰が切られるか分からない。大鎌も死神の象徴である。砂時計も恐らく人間の寿命の象徴であろう。ところが「砂時計の砂が流れ落ちてしまう」というのは、亡霊の夜の出没の時間を計ってもいるようだ。その時黒馬は棒立ちとなり、鼻息を荒くしたかと思う間に、火花を散らして、娘の下に沈んで消えてしまった。レノーレの心臓は生と死の狭間で戦っていた。辺りでは亡霊たちが月の光の下で、輪踊りをしながら、すすり泣くように、耐えろ、耐えろ、天の神と争うな、肉体は滅んだのだ。魂に慈悲のあらんことを！と言っているのがあった。

IV

最後が亡霊たちの輪踊りで終わっている。レノーレは死んだのか、生きているのか分からない。亡霊たちは天の神を出し、慈悲を願うなんてどうしたことなのであろうか。死者たちは最後の審判において天国か地獄に分けられるのであって、この世には甦らないのである。

先にも触れたように、キリスト教とドルイド教との混在がこのバラッドにはある。最後の「耐えろ、耐えろ」(Geduld! Geduld!)という言葉は、追われゆくケルトの民たちの叫びのように聞こえる。輪踊りはケルト紋様の渦巻を象徴しているようで、「渦は女性原理、死と再生、破壊と豊饒の象徴」⁽²³⁾でもありと言う。

ブルターニュ地方にはアंकウ (L'Ankou)・骸骨のある教会が多いと言われている⁽²⁴⁾。「教会にアंकウを置いたのは教会に行くたびに死への恐怖を改めて思い起こさせ、それからのがれさせてくれるのは教会しかないのだぞ」⁽²⁵⁾と人々に教え、罪の懺悔をさせていた。ところがケルトの民は「死は大鍋を通して新しい生につながる」⁽²⁶⁾イメージをもって、「アंकウに女の首をもたせたり、下に聖水盤を置いたり」⁽²⁷⁾して再生のイメージを表してしていたのである。この『レノーレ』の亡霊と神との混在も無意識のうちに表出されており、ロマン派詩人たちは改めて伝承バラッドの中に脈打っていたもの、いわゆるケルトの神話に惹かれたのではないだろうか。伝承バラッドを見直すことによって、死者の愛する生者への未練や、生者の愛する死者への執着を、叙情詩の中に新しいバラッド的要素として再生したのである。

既に「墓地派」詩人として、トマス・グレイ (Thomas Gray 1716~71) の『エレジー』*Elegy Written in a Country Churchyard* (1751年) が抒情深く人の死をたそがれの中で謡っている。ここではまだ亡霊の概念は出ていない。ところが『レノーレ』に見られる墓のイメージは、亡霊が愛する人を墓へ連れていくこととか、お墓での亡霊たちのぞっとする場面とかがある。いわゆる「怪

奇小説」とか「ゴシック文学」を生み出したと思われる要素である。そこには潜在的にケルトに通じるものがある。例えば、コールリッジ (S. T. Coleridge) の『クリスタベル』*Christabel* も、クリスタベルが月の光も淡い夜、櫛の木に宿り木のある根元でジェラルダイン (Geraldine) に出会うのである。櫛の木も宿り木もドルイドにとっては神聖なものであるのでケルト的なものの象徴である。ジェラルダインは5人の白馬の騎士に乘せられて、風のように速く駆けて、ここに連れられて来たというのも、『うたびとトマス』の馬の駆けるイメージを秘めている。声の細さも、身の弱々しさも霊を暗示させ、敷居を越える時の苦しさもそうである。「悪霊は城壁を破る魔力を持ってはいても、人の住居にはいるときには、その許しを得かつ敷居をまたがせてもらわなければならない。」⁽²⁸⁾ という。『ファウスト』にも出てくるというので、ゲーテも十分知っていたのであろう。境界を越える場合は儀式を必要とするのである。老マスティフ犬が唸るのも犬は霊を嗅ぎ分けていた。このあと『クリスタベル』の場合は、ジェラルダインの妖しい魔力に囚われていく話となっていく。キーツの『聖アグネス祭の前夜』(1819年)においても、同じように亡霊が亡霊と分からずに出てくるのである。ポーフィローが亡霊となってマデラインを城から連れ出して南の国へ行くのも、ケルトの神話の意識が秘められていると思われる。またエミリー・ブロンテ (Emily Brontë 1818~48) の『嵐が丘』*Wuthering Heights* (1847年)も、その最初の出だしからして触れられている。夜中カタカタと窓を叩く小枝の音がキャサリンの亡霊と思って、ヒースクリフが荒野に向かって呼びかけるのも、また最後になって亡霊を追いかけていくのも、ここから来ているいわゆるゴシック文学の特質の一つである。こうしたケルトの文学に表れた特質を辿っていくと、アーサー王物語との深い関係を知るのである。

アーサー王物語は、騎士道精神に基づく戦いと華やかな宮廷風恋愛の物語である。英国ではジェフリー・オブ・モンマスとか、マロリーを思い起こすが、フランスにおいては、その大きな役割を果たしているのがクレティアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) であり、アリエノール・ダキテーヌ (Aliénor d'Aquitaine) である。このアリエノール・ダキテーヌの生涯がイングランド

とブルターニュやアキテーヌ公国を舞台としているのである。かつてガリア地方と呼ばれていたこの地にはケルトの民たちが住んでいた。ガリア戦記によって知られるように、ローマ人によって攻められて征服されていたが、ローマの衰退によって、再びケルトの民たちがアイルランドやウェールズから渡ってきてケルトの文化を引き継いでいたのである。そしてブルターニュ公国を成立させていた⁽²⁹⁾。したがってこの地にはケルトの神話が残っているのである。アキテーヌ公国のギョーム 10 世の娘として生まれたアリエノールは 1137 年にフランス王となるルイ 7 世と結婚し、その年に王妃となる。1147 年に十字軍として王と共にエルサレムに向かい、1148 年 10 月に戻る。帰ってきてから子どもが生まれるが、夫との仲が悪くなり、1152 年に離婚をし、その年の 3 月 21 日にアンジュー伯のノルマンディー公のヘンリー・プランタジネットと結婚する。このヘンリーが 1152 年スティーヴン・オブ・ブロウ（イングランド王）が亡くなることによって、イングランド王ヘンリー II 世王となり、アリエノールも王妃となる。この時よりイングランドとブルターニュとポワチェ、ボルドー、トゥールーズといった地域を含む南仏とが彼女の舞台となり、宮廷文化が花開くのである⁽³⁰⁾。そのお抱え文士がクレティアン・ド・トロワで、『荷馬車の騎士・ランスロ』*Le Chevalier au Charrette (Lancelot)* が彼によってほぼできる。そこに登場するのがグウイネヴィア (Guinevere) であり、ランスロット (Lancelot) である。そのグウイネヴィアがアリエノールをモデルにしているように思えるのである。アリエノールが歩いた地、例えばウィンチェスターには「アーサー王の円卓」がある。アリエノールの影響が教会や文学に残っているように思われてくる。そしてこのアリエノールの名前こそレノールとなり、レオノーラとか、エレノーラとかになったりしている。この名にはケルトの余韻が残っているのである。またケルトのハルシュタット文化が、塩 (Salz) の交易によって栄えた。例えばオーストリアであるが、ザルツ (塩の) ブルグ (城) とか、ハル (塩の) シュタット (町) といった都市の名のように、ケルトの遺産が伝わっている。ドイツ・ロマン派の人たちは潜在的意識の中で伝承バラッドに惹きつけられたのも、遠い遙かな魂が残っていたからではないだろ

うか。それがイギリスのロマン派詩人たちを目覚めさせ、伝承バラッドを見直させた。新しいバラッドや叙情詩や小説の中に、何か魔的なものを秘めているのは、ケルトの神話が残っているからのように思えるのである。

《注》

- (1) 『ドイツ名詩選』：生野幸吉，檜山哲彦編，(岩波文庫 1998，岩波書店)，ゲーテ，ハイネの原文，訳文はこの書より引用または参照させて頂く。p. 127，なお「なじかは知らねど…」では「昔の伝えは，そぞろ身にしむ」と訳されている。
- (2) Franz Schubert, 1797~1828 年
- (3) 『ドイツ名詩選』 op. cit., p. 30.
- (4) フリッツ・マルティニー著：『ドイツ文学史—原初から現代まで—』，訳：高木実，尾崎盛景，棗田光行，山田広明 訳，(三修社，1989)，p. 194
- (5) 高宮利行監訳：アリス・チャンドラー著，『中世を夢みた人々—イギリス中世主義の系譜—』(研究社，1994)，p. 37
- (6) *Reliques of Ancient English Poetry* Vol. III, by Thomas Percy
 1) ed. Henry B. Wheatley: Dover Publications, 1966 年版，1886 年初版，pp. 130~133
 2) Dodsley in Pall-Mall 版 London, 第 2 版 1767 年，pp. 126-129
- (7) H. B. Wheatley: op. cit., p. 130
 'Dr. Rimbault points out that the chief incidents in Bürger's *Leonora* resemble those in this ballad.' H. B. Wheatley: op. cit., p.130
- (8) 原 一郎：『バラッド研究序説』，(南雲堂，1986)，p. 107。
- (9) 『バラッド研究序説』：op. cit., p. 115。
 テキスト名は
- ① *Lenore, The German Text of Gottfried Bürger's Ballad*, ed. Christopher Smith, Solen Press, Norwich 1996.
 ここには Bülger の独文，Tayler の英訳文，George Olaus Borrow の英訳文，Gérard de Nerval の仏訳文がある。
- ② Gottfried August Bürger, *The chase, and William and Helen* 1796 translated by Walter Scott [Woodstock Books, Oxford, 1989] (Jonathan Wordsworth, *Revolution and Romanticism*, 1789~1834)
- ③ *Lenore* by Gottfried August Bürger (Translated by Dante Gabriel Rossetti), London, Ellis and Elvey, 1900.
- (10) 永井豊実：“バラッド：『聖アグネス祭の前夜』”，城西大学研究年報，第 22・23 巻合併号

- (11) 山中光義：『バラッド鑑賞』（開文社出版，1988）， p. 31
- (12) *ibid.*, pp. 31～2
- (13) *ibid.*, p. 44
- (14) *ibid.*, p. 26
- (15) *ibid.*, p. 20
- (16) *ibid.*, pp. 231～6
- (17) 木村正俊：『ケルト生と死の変容』—『マビノーギ』にみられる「生」と「死」，
（中央大学出版部，1996）， p. 113
- (18) 山中光義：op. cit., p. 40， 訳は藪下卓郎氏
- (19) 井村君恵：『ケルト妖精学』（講談社学術文庫，1996）， p. 116
- (20) ジャン・クレイ著，高階秀爾監訳：『ロマン派』（中央公論社，1990）， p. 21
- (21) 堀 淳一：『ケルトの残照』（東京書籍，1997）， p. 175
- (22) *ibid.*, p. 133
- (23) *ibid.*, p. 175
- (24) *ibid.*, p. 130
- (25) *ibid.*, p. 132
- (26) *ibid.*, p. 132
- (27) *ibid.*, p. 132
- (28) 齊藤 勇：解説注釈：コウルリヂ『クリスタルベル』（研究社小英文学叢書，
昭和 59 年）， p. 44
- (29) 堀 淳一：op. cit., pp. 19～20
- (30) レジーヌ・ペルヌー著，福本秀子訳：『王妃アリエノール・ダキテーヌ』（パピ
ルス，1996）参照。

- ビュルガーの『レノーレ』のテキストは，
Leonard Forster: *The Penguin Book of German Verse*, (Penguin Books, 1959),
pp. 178～190 を使用。
- 鈴木敏夫教授には，関係資料のご援助を頂き，お世話になりました。厚くお礼申し
あげます。

- ここに係わる作品，作家の年代記
1765 年 『英国古謡拾遺集』 *Reliques of Ancient English Poetry* 出版
1773 年 『レノーレ』 *Lenore* 作，1774 年号の《ゲッティンゲン年間詩集》 (*Göttinger
Musenalmanach*) に載る。
1778～9 年 『民謡集』 (*Volkslieder*)，1807 年以降は『歌謡における諸国民の声』
(*Stimmen der Völker in Lindern*)

- 1782年 ゲーテの『魔王』(Erlkönig)
- 1790年 テイラー (William Taylor, 1765~1836) の『レノーレ』訳出版
- 1796年 英国においてレノーレ・ブーム
- 1798年 ワーズワース, コールリッジ, リリカル・バラッド出版
- 1815年 Franz Schubert, 1797~1828 の『魔王』作曲
- 1819年 キーツ (John Keats) の『聖アグネス祭の前夜』
- 1882~1898年 チャイルド (F. J. Child, 1825~96) の『英蘇古謡集』*The English and Scottish Popular Ballads* 5巻発刊